

東西における環境思想

一 はじめに

東日本大震災（地震・津波）や、それによって引き起こされた原発事故、さらには放射能汚染の拡大の中で、近代科学文明に基づいた社会のあり方が見直されつつある。とりわけ事故と汚染を踏まえて、いのちや健康を最優先する環境思想の（再）構築が求められている。

その際、これまでの環境思想の歴史を振り返ることが重要であることは言うまでもない。しかしながら、これまでの環境思想史の多くは、欧米、とりわけアメリカにおける環境思想の展開を踏まえた歴史記述がなされている。「環境思想」が欧米で生まれ、展開してきたことは確かであろうが、その「輸入」だけで問題は解決するのであろうか。

西洋近代の自然支配の思想の限界を前に、東洋的な思想の意

義が注目されている。例えば、小坂国継氏はその点に関してきわめてラディカルな提言を行う。

「今日、明らかに自然はその本来のあるべき姿をしていない。さまざまな作為が加えられ、外科的手術がおこなわれて、自然はすっかり変わり果ててしまった。一言でいえば、生氣と靈氣を失って、ただ物体の塊と化している。そして、それは現在のわれわれ自身の姿でもあるのである。われわれはただ身体的には生きているが、靈性的には生ける屍となってしまった。

われわれのなすべきことは自然をそのあるべき姿に戻すことであろう。そして、それは人間の心性がその本来あるべき姿に戻るといふことでもある。そしてこの点で、われわれは西洋近代の自然支配の思想からではなく、一切の作為を否定して主体的に自然に身を委ねる東洋的な無為自然

宮嶋 俊一

の思想から学ぶところがあるのではなからうか。今日ほど自然観や価値観の転換がもたらされている時代はないであろう。⁽³⁾

近代社会の暮らしにとっぴりと浸かっているわれわれが「無為自然」に生きることは困難かもしれない。また、(本稿でも触れることとなるが)残されるべき自然が人間による「一切の作為」を否定した、いわゆる原生自然であるのか、それとも人間が自然に手を加えながら、人間以外の生物と共存しているような里山的自然であるのか、議論が分かれるところでもあろう。だが、いずれにしても「自然観や価値観の転換がもたらされている」ことは確かであり、そのためにも、欧米の環境思想との比較を踏まえた日本の「環境思想」の再考が急務であると考える。

かつて和辻哲郎は風土論において、風土がわれわれの精神や思考様式を育んできたことを説明した。⁽³⁾この風土論の環境決定論的性格には批判があるものの、自然環境に対する見方・考え方に關しては、やはりそれが生まれた環境的背景を考慮する必要があるだろう。

なお、ここで言う環境について簡単に確認しておきたい。「環境」という語は一般には、周囲を取りまく外界の状況や条件という意味で用いられるが、生態学的には生物を取り巻くすべての外界の条件 (Umgebung) ではなく、外界の条件のうち生物の生活に關与するもの (Umwelt) である。今西錦司が「生物

の認識しうる世界がその生物にとつての環境だ」と述べたのもその意味である。よって、環境という概念は、「自然」という概念とは異なり)ある主体を前提とする。多くの場合、その主体は人間である。よって、保護されるべきは、人間の生活に關与し、また人間が健康に生存できる環境ということになる。⁽³⁾だが、人間にとつての環境の意味については、次に見るようにこれまで多くの議論が重ねられてきた。

二 欧米の環境思想——「保存」か「保全」か

欧米における環境思想の生成において啓蒙主義思想に対するロマン主義の影響(一九世紀)を見逃すことはできない。一八世紀末から一九世紀にかけて産業革命が進行し、人間の自然への支配力は高まったが、その反動として、自然を神秘主義的に捉え、自然の全体性や人間と自然との一体性を説くロマン主義の思潮が生まれた。そしてアメリカではエマソンやソローといった超越主義者たちが影響力を持った。

彼らから影響を受けたミューアはヨセミテ国立公園を「保存」の立場から守るべきと主張した。「保存」とは、「自然保護がもたらす人間の精神的充足的な側面を重視し」、自然は「天然資源の貯蔵庫ではなく、人間の日常生活の癒しとなるべき神からの贈り物」とされる。⁽⁶⁾それに対して森林管理官を務めていたピンショーは、森林を管理するという観点から自然保護に取り組み、森林の「保全」を目指した。「保全」とは、「天然資源を賢

明、かつ、効率的に利用することであり、人間による天然資源の効率的利用は資源の浪費を防ぐ最も合理的な環境保護政策」とされる。ここから「保存」派と「保全」派の論争が生じた。功利主義的な「保全」派とロマン主義的な「保存」派の対立は、その後も形を変えて出現し、現在でも議論は絶えない。

確かに、「保存」か「保全」かという図式は、一面で普通のである。しかし、この論争はアメリカ、カリフォルニア州のヨセミテ国立公園内にあるヘッチヘッチ渓谷を巡って現れたものであることもまた確かである。当然ながら、「何を」「いかに」「なぜ」、「保全」あるいは「保護」すべきかは、その土地、風土、自然状況、さらには思想的・宗教的な背景など、様々な要因が影響を与えることであり、一般化・普遍化可能な部分だけでなく、個別具体的な思想的背景までも視野に含めて考察することが必要である。

三 日本の環境思想——南方熊楠を例に

ここまで、欧米の近代文明批判としての環境思想の流れを確認してきたが、日本では江戸時代から明治・大正期にかけて、それらとは異なる環境思想が生まれていた。本稿においてそのすべてを詳細に論じる準備はないが、いくつか例を挙げておくと、江戸時代の初期から山林の保全の必要性を説き、またそれを実践してきた熊沢蕃山、「自然真宮道」において現代のエコロジーに通ずる思想を展開した安藤昌益、神道・仏教・儒教な

どと農業の実践から「報徳」思想を編み出した二宮尊徳、さらに神社の鎮守の森が失われることを危惧し神社合祀令に反対運動を起こした南方熊楠らがそうした思想家にあたる。とりわけ、本稿では以下、南方熊楠の思想を取り上げていきたい。

南方の思想を捉えるためには、日本の神道思想を簡単に振り返っておく必要があるだろう。なぜなら日本の自然観は神道との結びつきが深いからである。「原神道」とも呼ぶべき古代日本の宗教は自然の森と結びつき、儀式は森の中で執り行われていた。森そのものが神であったため神社に社殿は不要であった。中世から江戸時代を経てこの「原神道」的な宗教感覚は維持され、村々には共同体ごとに小さな神社が祀られ、そこに「故郷」を形成することが出来た。

だが明治期になり、国家神道のイデオロギイに基づいて、このような神社の統廃合が行われた。明治三九年一月、当時の西園寺内閣内相であった原敬により「一町村につき神社は一家郷にまとめよ」という神社合祀令が出された。南方熊楠は「家郷の空間」の危機として、この統廃合に反対した。その理由は、以下のようなものである。神社合祀は、敬神思想を弱め、民の和融を妨げ、地方を衰微させ、国民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を害し、愛国心を損ない、土地の治安と利益に大害をもたらし、史蹟と古伝を滅却し、天然風景と天然記念物を亡滅する亡国的政策だ、ということである。

四 考察とまとめ

南方の環境思想を鶴見和子は次のようにまとめている。

南方は、植物学者として、神林の濫伐が珍奇な植物を滅亡させることを憂えた。民俗学者として、庶民の信仰を衰えさせることを心配した。またムラの寄合いの場である神社をとりこわすことによって、自村内自治を阻むことを恐れた。森林を消滅させることによって、そこに棲息する鳥類を絶滅させるために、害虫が殖え、農作物に害を与えて農民を苦しめることを心配した。海辺の樹木を伐採することにより、木陰がなくなり、魚が海辺によりつかず、漁民が困窮する有様を嘆いた。産土社を奪われた住民の宗教心が衰え、連帯感がうすらぐことを悲しんだ。そして連帯感がうすらぐことによつて、道徳心が衰えることを憂えた。南方は、これらすべてのことを、一つの関連ある全体として捉えたのである。自然を破壊することによつて、人間の職業と暮らしとを衰微させ、生活を成り立たなくさせることによつて、人間性を崩壊させることを、警告したのである。

この指摘は重要である。近代科学的な思考が問題を分解・細分化していった結果、問題の全体を全体として捉える視点がわれわれ近代人から失われてしまった。生態系の全体を捉えることの重要性を鶴見は南方から読み取っているのである。

また、中沢新一も同様の指摘を行っている。

彼は運動の展開の中で（中略）ナチュラリストの狭い視野をはるかにのりこえて、前代未聞の深まりをもつたエコロジー思想を展開させることに成功したのである。彼のエコロジー思想は、たんに自然生態系にたいする配慮（生態のエコロジ）にとどまるものではなく、人間の主観性の生存条件（精神のエコロジ）や、人間の社会生活の条件（社会のエコロジ）を、一体に巻き込みながら展開される、きわめて深遠な射程をもつものだった。

南方の運動と思想は故郷、熊野に根ざしたものであり、またその地の自然・社会の全体を体系的に把握する中から生まれたものであった。またそれは、細分化・分断化されていく近代西洋科学的な思考に対して、統合的・総合的な思考を示していると言える。

先に、欧米の環境思想において「保存」「保全」の対立が、生態系中心主義的環境思想と人間中心主義的環境思想という二つの大きな流れを形成してきたことを指摘したが、南方の環境思想は、人間の暮らしを守ることが同時に自然の生態系を守ることにつながるといふ意味で、この二項対立的な思想的対立の統合を目指すものと見ることもまた可能なのである。

欧米、日本いずれの環境思想においても近代文明批判のモチーフが含まれるが、それは近代化の過程で守られるべき「環境」が「発見」されたからである。その意味では共通の問題意識が

そこに存在することは確かだ。しかし、日本と欧米では近代化の過程も自然環境も異なるし、環境保護思想の背景となる思想・宗教も異なる。そのことを踏まえ、日本環境思想史の構築が目指されるべきであろう。本稿はそうした問題意識から出発した。そしてその意味で南方は熊野という土地から環境思想を立ち上げ、結果的にそれは近代的二項対立を止揚するものとなったのであり、その思想は高く評価されてしかるべきであると考えてる。

(1) 松野弘「環境思想とは何か―環境主義からエコロジズムへ」筑摩書房、二〇〇九年、小原秀雄監修「環境思想の出現（環境思想の系譜1）」東海大学出版会、一九九五年、同監修「環境思想と社会（環境思想の系譜2）」東海大学出版会、一九九五年、同監修「環境思想の多様な展開（環境思想の系譜3）」東海大学出版会、一九九五年。なお秋道智綱編著「日本の環境思想の基層 人文知からの問い」岩波書店、二〇一二年といった取り組みも存在する。

(2) 小坂国維「内なる自然とディープ・エコロジー」国際宗教研究所編「現代宗教2010 エコロジーとスピリチュアリティ」秋山書店、二〇一〇年、一〇七頁。

(3) 和辻哲郎「風土」岩波書店、一九七九年（初出は一九三五年）。

(4) 今西錦司「生物の世界」「生物の世界ほか」中央公論新社、二〇〇二年（初出は一九四一年）、六七頁。

(5) 加茂直樹「環境と人間」加茂直樹他編著「環境思想を学ぶ人のために」世界思想社、一九九四年、四一―二〇頁を参照。

(6) 松野、前掲書、四七頁。

(7) 同右。

(8) 保存派の系譜としてはディープ・エコロジー思想が有名である。一九七九年、アルネ・ネスは、いままでの環境保護の考え方が汚染や資源枯渇に反対するだけの「シャロウ・エコロジー」であるとし、

それに代わる「ディープ・エコロジー」を唱えた。生命体や人間を相互に関連した全体で捉え、生命圏の中で全生命体平等主義を主張した。Ness, A. *Ecology, Community, and Lifestyle*, Cambridge University Press, 1989. 斉藤直輔他訳「ディープ・エコロジーとは何か」文化書房博文社、一九九七年。

また「保存」「保全」をあらためて定義し、前者に批判を加えたのがパスモアである。彼は保存論／保全論の対立を、自然の中に内在的な価値を認めるか、あるいは自然を人間の利益や幸福を実現するための手段・道具と見るかの対立であるとし、前者を無知と野蛮に導く全体主義として批判した。Pasmore, J., *Man's Responsibility for Nature: Ecological Problems and Western Traditions*, Gerald Duckworth & Co. Ltd, 1974. 間瀬啓允訳「自然に対する人間の責任」岩波書店、一九九八年。

このパスモアの批判に対して、テラーは生命中心主義の立場から、個々の生命・生物を尊重すべきと主張した。またレーガンも（一部は乳類の）個々の動物にのみ人間同様の生存権を認めるべきと主張した。いずれも「保存論」の継承ではあるものの、その性格は個体主義的な保存論であった。レーガン（青木玲訳）「動物の権利の擁護論」小原秀雄監修「環境思想の多様な展開（環境思想の系譜3）」東海大学出版会、一九九五年所収。それらに対し、キャリコットは、レオポルドの土地倫理を援用し、それが生態系に価値を置いている点に注目し、構成員の生態系への貢献の度合いに応じてその価値を評価するという生態系中心主義を主張した。キャリコット（千葉香代子訳）「動物解放論争―三極対立構造」同右、所収。

このように、「保存」「保全」の対立は、生態系中心主義的環境思想と人間中心主義的環境思想という二つの大きな流れを形成してきたと言えるだろう。

(9) 中沢新一「森のパロック」講談社、二〇〇六年、三二五―三二八頁。

(10) 「第一、神社合祀で敬神思想を高めた」とは、政府当局が地方官公吏の書上に囃されるの至りなり。（中略）田舎には合祀前どりの地

にも、かかる質樸にして和氣霽々たる良風俗あり。平生農桑で多忙なるも、祭日ごとに嫁も里へ帰りて老父を省し、婆は三升樽を携えて孫を抱きよめの在所へ往きしなり。かの小窮窟な西洋の禮拜堂に貧族富豪のみ車を駆せて説教を聞くに、無数の貧人が道側に黒麩包を咬んで身の不運を喫つと得環なり。かくて大字ことに存する神社は大いに社交をも助け、平生頼みたりし用談も祭日に方つき、鹿間乃至五里、はなはだしきは十里も歩まねば詣で得ずとあつては、老少婦女や貧人は、神を拜し、敬神の実を挙げ得ず。南方熊楠「神社合祀に関する意見」中沢新一編「南方熊楠コレクション」V 森の思想」河出書房新社、一九九二年、四九八頁。

(11) 「第三、合祀は地方を衰微せしむ。従来地方の諸神社は、社殿と社地また多くはこれに伴う神林あり、あるいは神田あり。別に基本財産というべき金なくとも、氏子みな入費を支弁し、社殿の改修、祭典の用意をなし、何不足なく数百年を面白く経過し來たりしなり。今この不景氣連年絶えざる時節に、何の急事にあらざるを、大急ぎで基本財産とか神社の設備とか神職の増俸とかを強いるは心得がたし。同右、五〇三頁。

(12) 「第四に、神社合祀は国民の慰安を奪い、人情を薄うし、風俗を害することおびただし。(中略)神社の人民に及ぼす感化力は、これを述べんとするに言語杜絶す。いわゆる「何事のおはしますかを知らねども有難さにぞ涙こぼるる」ものなり。似而非神職の説教などに待つことにあらず。神道は宗教に遠いなきも、言論理窟で人を説き伏せる教えにあらず。本居宣長などは、仁義忠孝などとおのれが行なわずに事々しく説き勧めぬが神道の特色なり、と言えり。すなわち言語で言い頼わし得ぬ冥々の裡に、わが国万古不変の国体を一時に頭の頂上より足趾の尖まで感激して忘るる能わざらしめ、皇室より下凡民に至るまで、いずれも日本国の天神地祇の御裔なりという有難さを言わず説かずし悟らしむるの道なり。古來神殿に宿して靈夢を感ぜしといひ、神社に參拜して迷妄を聞きしといひは、あた

かも古欧州の神社神林に詣でて、哲士も愚夫もその感化を受くること大なるを言えるに同じ。別に神主の説教を聴いて大益ありしを聞かず。真言宗の秘密儀と同じく、何の説教講釈を用いず、理論実験を要せず、ひとえに神社神林その物の存立ばかりが、すでに世道人心の化育に大益あるなり。同右、五〇八頁。

(13) 鶴見和子「南方熊楠」講談社、一九八一年、二二三—二三四頁。

(14) 中沢新一「森のパロック」講談社、二〇〇六年、三五七—三五八頁。

(みやじま・しゅんいち、宗教学・比較思想・死生学、大正大学非常勤講師)